

# 地元と一体化した 日本の中華街は 世界でも珍しい

王維 わん うゑい  
香川大学経済学部教授



わん うゑい ●中国瀋陽市出身。名古屋大学大学院博士後期課程修了。学術博士。著書に『日本華僑社会における伝統の再編とエスニシティ』『素顔の中華街』などがある



長崎の唐人貿易の歴史を語る日本人による伝統的芸能「龍踊り」は、ランタンフェスティバルにも欠かせない芸能の一つである 写真提供：筆者（45ページ左をのぞく）

日本の中華街は日本人を対象にイメージがつけられている

北米やヨーロッパ、東南アジアなどの地域では、従来、中国系移民の集団的な移住によって、さまざまなチャイナタウンが形成され

ている。チャイナタウンは人々にとって商売の場であり、生活の間であり、訪れる人も中国系の人々が主体とされている。各地のチャイナタウンでは、中国で最大の年中行事である春節を

い。そして、構成員の半分以上は中国系の人ではなく、日本人である。横浜中華街でも、多くの中国系の人々が居住しているにもかかわらず、中華街を訪れる人たちの多くは日本人である。

祝うイベントや行事がある。しかし、春節は、中国系の人々にとつて、あくまでも自分自身の祭であり、イベントなのである。もちろん、春節祭を見るためにチャイナタウンに来る観光客もいるが、そこに住み暮らしている中国系の人々にとつては、春節祭は観光のためのイベントではない。

これに対して、日本の中華街は中国人だけのコミュニティではなく、特に神戸や長崎の中華街の場合では、そこに居住する人は少なく、生活の場所というよりも、むしろ商業の街としての機能が強い。

つまり、日本の中華街は、いろいろな意味で「日本的」であり、日本人を対象にイメージがつけられている。そのため、春節祭も日本人の観光客を主な対象としている。その意味において、北米や東南アジアの中華街と大きな違いがある。中華街における伝統文化の創造活動では、日本人も主人公として活躍してきた。日本人と一体化した中華街、それは、世界でも珍しい中華街の姿であり、そこにおもしろさもある。

## 中華街は外国人居留地の一角に 雑居することから始まった

日本の中華街の夜明けは江戸時代に始まる。まず、当時日本で唯一の開港地だった長崎に、三江や福建などから貿易に従事する中国人（のちに「華僑」と呼ばれる）が渡来してきた。そして、日本の開国前後に神戸、横浜、函館が開港されると、広東からも多くの中国人がやってきた。

開港後の長崎、神戸、横浜では、条約国の外国人を集中的に住させる外国人居留地が設置された。居留地内では居留外国人によ

→バンクーバーのチャイナタウンのシンボル、中華門  
↓シンガポールのチャイナタウン入口に置かれた春節  
祭の飾り付け。2005年の干支である酉が飾りのテ  
ーマになっている  
写真提供：柴永文夫



る自治行政が実施され、問題が発  
生しても、日本政府の権限は排除  
されるといったものであった。これ  
は1949年まで中国の上海と天

津に存在した外国  
人租界の影響を受  
けていたからだ。  
しかし当時、日  
本と条約を締結し  
ていなかった国の  
民である中国人  
は、基本的に居留  
地のなかでの居住  
を認められていな  
かった。だからと

いつて、居留地以外の地域に住む  
ことや日本人との雑居も許されて  
いなかった。当時、来日する中国  
人の多くは、欧米の商船に乗って、  
欧米人を対象にした商売に従事し  
ていた。そのため、外国人居留地  
の一角にひっそりと雑居すること  
ができたのだ。そして、その一角  
が、のちの中華街として発展した  
のである。

つまり、日本の中華街の歴史は  
日本の開港に伴う、中国人を含む  
外国人の来日と同時に始まり、中  
華街は外国人居留地とともに、横  
浜、神戸、長崎の町に異文化の  
色をもたらしただけである。

しかし、中華街は、日清戦争や  
日中戦争により、大きなダメージ  
を受けた。戦前の賑わいと中国的  
な景観は、戦後から1970年代  
ごろまで戻ることにはなかった。特  
に、横浜や神戸の中華街では、朝  
鮮戦争やベトナム戦争の時期、外  
人やバーやキャバレーなどが急増  
し、裏町や歓楽街の要素が加わっ  
たために、怖い、汚い、暗いとい  
うイメージが生まれ、一般の人が  
訪れる街ではなくなった。一時期、

日本映画の暴力団が登場するシー  
ンなどは、いつも中華街で撮影が  
行なわれるほどだった。

### 70～80年代に中華街の整備が進み、 全国から観光客が訪れ始めた

70年の大阪世界万国博覧会のこ  
ろから中華街を訪れる人が増え始  
めたが、さらに中華街を整備・発  
展させるために、横浜中華街では、  
71年に中華街で商売を営んでいる  
華僑と日本人が協力して、発展会  
を前身とする、横浜中華街発展会  
協同組合が設立された。その協同  
組合は、次々と活発な活動を行な  
い、街を盛り上げるのに大きな役  
割を果たした。

まず、中華街のイメージを改善  
する目的で、シンボルとなる中華  
門の建設が進められ、歩道の改装  
と舗装も行なわれた。その結果、  
76年時点で横浜中華街には5つの  
門が建てられた。

72年の日中国交回復による友好  
ムードのもと、牌楼(はいろう)がテ  
レビヤラジオ、新聞、雑誌などで頻繁に取  
り上げられた。さらに80年代に入  
ると、エスニックブームとともに  
中華街への関心はさらに高まり、

全国各地から観光客が訪れるよう  
になった。

横浜中華街を皮切りとし、神戸  
南京町と長崎新地中華街でも、中  
華街を発展させる目的で、中華街  
商店街振興組合が設立され、中華  
街の建設が始められた。80年代の  
前半までには、両中華街とも、中  
華門をはじめとするハード面の建  
設と整備が行なわれた。

建設には、中華街を単に商業  
地・観光地として築いていくだけ  
でなく、豊かな中国伝統文化を持  
つ街として育てていこうという趣  
向が凝らされた。特に、中華街の  
シンボルとなる中華門の建設は、  
より本物らしいものをつくらうと  
中国の風水思想などに基づいて設  
計され、東西南北の門はそれぞれ  
青、白、赤、黒に色分けされ、  
各門に守衛神として霊獣が彫り込  
まれた。

### 中国伝統文化からイベントが生まれ 地域の新たな伝統行事になった

日本の中華街の振興と発展は、  
横浜では70年代、長崎と神戸で80  
年代に入ってからのものである。  
つまり、現在の中華街のイメージ

は、ただか20数年間で形づくられてきたものにすぎない。しかし、それは、街並みの特徴が徐々に失われつつあった状況に危機感を持った中華街の人々が、自ら変えていこうとした結果、得られたものである。華僑のルーツを意識しながら、地域の特徴を活かし差異化を図ると同時に、日本のなかに溶け込むように工夫が凝らされたのであった。

中華街に現在のような繁栄をもたらしたのは、80年代半ばに中華街で始められた「春節祭」であった。これを皮切りに、横浜の「開帝祭」「媽祖祭」「中秋祭」、神戸南京町の「中秋祭」、長崎の「唐人屋敷祭」「中秋祭」など、中国伝統文化をベースにしたイベントが次々と生み出され、実施されるようになった。これら中華街のソフト面における行事は、観光客を呼び、街おこしのために企画されたものである。

春節祭は、元来、中国の春節と元宵節の習慣にちなんだイベントだが、中華街のそれは、必ずしも伝統文化をそのまま踏襲した

ものではない。各地域の状況にあわせて中国文化の一部を選択し、新たに創り出されたものである。これらのイベントは年々盛大になり、地域の観光に大きく寄与するようになっていく。特に長崎の春節祭は、ランタンフェスティバルに発展し、長崎市の冬を飾る大きな風物詩ともなり、日本全国の主要な伝統行事・祭・イベントの一つとされるまでになっている。

### 横浜中華街では政治的対立を超えて、経済発展が進んだ

横浜中華街は長崎や神戸と異なり、多くの華僑が居住しており、商売の街のみならず、生活の街でもある。したがって、中華街の経済の発展は、華僑の生活に密接に関わっている。

1949年の中華人民共和国の成立は、横浜華僑社会に大きな影響を及ぼした。華僑社会は台湾支持派と大陸支持派とに分裂し、学校も二つに分かれることになった。イデオロギーの対立は、政治的緊張の部分的緩和、中華街の急速な経済発展、日本社会のエスニックブームや観光需要の増大など

## 春節祭

### はこうして生まれた

#### 長崎の新地中華街

1986年にシンボルとなる中華門が完成。観光客を呼ぶため、翌年、中国の伝統にちなんだ春節祭が中華街振興組合によって計画された。赤い灯笼を飾ることが祭の主題であったため、灯笼祭と呼ばれた。新地中華街はわずか40店舗ほどで、そのうち約半分は日本人が経営する。華僑と日本人は一体となり、灯笼祭を自分たちの祭として育てあげた。

94年に長崎都市発展戦略の一環として正式な観光の柱と位置づけられ、長崎市全体の祭「ランタンフェスティバル」に発展。開催期間の2週間の集客数は、09年には長崎市全人口の2倍以上増加した。



新地中華門

#### 神戸南京町の中華街

1977年に南京町商店街振興組合が設立。神戸市の区画整理の一環で新たな観光スポットとして再建設された。新築の建物には中国的デザインが採用され、既存建築物も中国風に改修された。

さらにより観光客を呼び寄せるため、1986年に華僑や日本人の二代目、三代目の店主ほか、約40名で青年部を結成。87年に「春節祭」を企画し実施した。

90年には、南京町は神戸市都市景観条例に基づく景観形成地域の指定を受け、さらに97年には、「神戸南京町春節祭」が市から地域無形民俗文化財の指定を受けた。



南京町の長安門



横浜中華街の大通りに立つ善隣門。横浜中華街には現在10基の門があるが、なかでも古く、初代は1955年に完成。89年のリニューアル時に、友好の意味を込めて、今の名前になった

の社会的環境の変化により80年代までには緩和されたが、しこりは残っていた。

そのなかで、政治的な対立よりも中華街の経済発展、そのための街づくりが考えられ、横浜中華街の文化をアピールしようというこ

93年の牌樓の改修と増設など、中華街の街づくりに大きな一歩を踏み出す契機となった。

中華街で生活する人たちによってつくられたこの春節祭は、単に観光客を呼び寄せるという意味だけでなく、横浜華僑の調和と融合を進める意義があり、また、古来の中国伝統の行事を実施することによって、中華街で衰退しつつあった祖国の文化伝統の復興、自分たちのアイデンティティの確立をめざすといった意味も持ったの

である。

### 「新華僑」が構想する 「東京チャイナタウン池袋」

日本の中華街で活躍している中国系の人は、主に戦前から来日した、いわゆる老華僑とその二世、三世の人たちである。日本社会で生まれ育った彼らは、日本人社会への定着・社会化によって多元的なアイデンティティを持つようになった。

そうしたなかで、日中関係の改善を契機として、特に中国人のイメージの改善、街おこしや観光のニーズの増大を背景として、彼らは中国文化の愛着や伝統文化の復興を願う心情から、日本におけるエスニックブームにのっとり、母国文化の文化要素の一部を意図的に選択した。中華街の伝統づくり、とりわけ新たな伝統とアイデンティティの象徴を創出することによって、中国文化を活かした地域と彼らのエスニシティの活性化を果たしたのである。

近年は、長崎・神戸・横浜のような従来の中華街以外にも、東京の池袋に中国の新移民によるこれま

でとは違った中華街の形成が見られる。池袋駅周辺半径500メートルに約200軒の中国に関連する料理・雑貨を中心とする店舗や商業施設があるこの中華街は、経営者の多くが78年に中国改革・開放政策が実施されて以来、来日した

「新華僑」と呼ばれる中国人である。この地域は、最近では池袋チャイナタウンと呼ばれ、新華僑の情報集積基地とされる。従来の中華街と異なり、伝統的な中華門もなければ、中華街特有の色鮮やかな看板が立ち並んでいるわけでもない。そして中華街のような商業組織もない。その特徴の一つは日本人観光客向けではなく、東京の中国人住民向けの店が集まっていることである。

08年、この地域にいる中国人経営者たちによって、東京中華街促進会が成立された。その構想は、池袋に点在する中国関連商業施設を組織化し、「東京チャイナタウン池袋」の統一ブランドで、新しい観光スポットとして池袋をPRすることであり、今後の発展が注目される。